日刊 動労千葉

87. 4. 3

No. 2517

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉砕！

動労革マル打倒―鉄道労連解体の闘いこそ

中曽根の「分割・民営化」を粉砕する道

『差別しろ・新事業体に入れるな』とワメク松崎許すな

「四月一日」新会社が発足した。だが、日刊で明らかにしたように中曽根の分割・民営化は失敗し、破産してきているということは、中曽根の手先となってきた（鉄道労連東日本委員長）動労革マル・松崎がすさまじい危機にたたきこまれ、「分割・民営化」の最大の狙いである松崎をつかった国労・動労千葉をたたきつぶす攻撃も破産したということでもある。中曽根は「分割・民営化」が破産においこまれればおいこまれるほど、革マルをつかって襲いかかってくる。「四月一日」、まさに新たな組織争闘戦に突入した。

好むと好まざると「労・労」対決の激化は不可避だ

国労・動労千葉が「四月一日」になだれこむことに大打撃をうけた動労革マル松崎は、危機感を深め、一層凶暴となって、なりふりかまわぬ国労・動労千葉破壊にうってでている。

「四月一日」お祭り騒ぎの中で新会社へ移行した。だが「国鉄問題」は何一つ解決せぬままの〃出発〃だ。「新会社収支見通し」のデッチ上げをはじめとした分割・民営化のすべてが世間をたぶらかす大ペテンで塗り固められたものだ。「黒字の新会社」「三島補助金で三島黒字」は〃黒字化するための数字合わせにすぎない〃（サンケイ新聞）ことは間もなく明らかになるだろう。

中曽根は、「分割・民営化」が破産においこまれればおいこまれるほど、革マル松崎を前面におしたて、この十月「一企業一組合」にむかって国労、動労千葉に襲いかかってくる。好むと好まざると「労・労」対決の激化は不可避だ。

いまこそ、組織争闘戦にうってでて、革マル鉄道労連を解体・一掃しよう。

これが労働組合のやることか！

「国労は四月以降全滅」「三月配属で国労の〃敗北宣言〃は明確となる。なぜなら三万人の余剰人員を含んだ採用でしかなく、われわれ組合員が希望した職場と職種につくことになるからである」「民間企業は不必要な余剰人員はおかない」「やがてとけて消えさる運命となることを、いまやはっきりさせておいてやろう」

―革マル鉄道労連新聞（二月十七日号外）―

しこり消えぬ「労・労対立」

三月三日 千葉日報

愛知県半田市の武豊線半田駅。単線で、日中は上下一本の列車しかなく、乗降客もまばらだ。

午前八時半。半田駅の一日は点呼で始まる。「いらっしゃいませ」「はい」「どうぞ」。若い駅員が張りのある声で唱和する列の中に、駅一番のベテランで国労組合員の鈴木洋三さん(四〇)がポツンと立っていた。

仕事奪われた

二十二年間半田駅で続けてきた出改札の仕事を昨年暮れ外され、点呼以外に決まった仕事がなくなった。「仕事がないことは何とも言えずやるせない」―今月十日、別の駅に配転された鈴木さんは、配置換えの前に半田駅の駅員室の片隅で寂しそうに話した。

鈴木さんに代わって出改札の仕事をするのは、昨年九月転勤してきた動労の組合員だ。国労が「血の入れ替え」と呼んだ人事で、駅の主導権は完全に国労から動労に移り、以前からの国労駅員は鈴木さんら二人だけになった。

動労の正治博明さん(三四)は「僕らは派遣にも出たし、運転から営業に職種転換した。雇用のために努力してきた。何もしていない国労と差がついて当然」と話す。「以前からいる二人はお荷物。同じ職場には置きたくない」とも言い切った。

心にしこり…

雇用不安の中のこの一年。国労が主導権を持っていた労組地図はがらりと変わった。鉄労と動労による国労揺さぶり。当局は「組合による差別はしてない」というが「分割・民営反対イコール勤務成績不良」という図式の中で国労は崩壊に向かった。

労組の対立は職員の心にも、しこりとなって残った。わずか十六人の駅員が動労、国労旧主流派、国労本部派の三グループに分かれて、いがみ合った。「以前は和気あいあいとして、いい職場だったのに…」。鈴木さんはこう言い残して別の職場へ移って行った。

復旧に3時間

半田駅だけでなく、多くの職場で人間関係が壊れ、チームワークにもひびが入った。安全確保に問題はないだろうか。

先月二日夜、愛知県春日井市内の中央線で起きた架線事故の復旧に三時間以上かかり、特急しなのが五時間も遅れた。「国労のベテランが排除されたことで職場の和が乱れ、仕事のノウハウがうまく伝わらなくなったのが原因」との指摘もある。

↑労働者の人間性、魂まで奪い去る

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！